

[講演要旨]

文禄五年(1596)地震における瀬戸内海周辺での被害状況

松岡 祐也

§ 1. はじめに

文禄五年(1596)閏七月に発生した豊後地震(十二日)・伏見地震(十三日)の規模を考える場合、その被害範囲を把握する必要があるが、中間に位置する瀬戸内海沿岸地域が問題となる。また、これまで一部で言われていた伊予地震が存在するとした場合には、さらに被害範囲の把握は複雑になる。

瀬戸内海沿岸地域における地震の状況については、すでに萩原ほか(1995)や中西(2002)などによって言及されている。しかし、そこで得られた史料の整理は十分とは言えないと思われる。

本報告では、現在知られている史料から瀬戸内海沿岸地域での地震の状況を整理することを目的とする。また、一部で存在するとされている伊予地震について、その可能性と被害範囲についての展望を述べたいと思う。

§ 2. 讃岐の被害状況

讃岐国(香川県)での地震被害については、『讃岐国大日記』が知られている。この史料について萩原ほか(1995)は讃岐国内のどこの被害を示しているのか、また日時不同など未解決点があるとしている。また『一宮由来帳』などの史料についても地震後100年以上経過して書かれたものであること、被害内容の不明確さを指摘している。

讃岐の被害状況については、よく分からない点が多い。現在知られている上記の史料も含め、さらなる史料調査が必要であろう。

§ 3. 安芸・備後の地震状況

安芸国(広島県)の地震状況については、桜尾城(廿日市市)と厳島に関する史料が確認できる。このうち厳島について、毛利輝元の手紙から、厳島神社から「嶋中無別儀」であったという知らせがあったことが分かる。同様に、桜尾城についても被害が無かったことが史料に見えることから、少なくとも安芸の沿岸部では地震による揺れのみであったと判断できる。

また、備後国(広島県)については仏通禅寺の史料が知られているが、揺れの記述があるのみで、寺を含めた周辺域での具体的な被害を示す記述は見当たらない。萩原ほか(1995)は備後における被害はよく分からないとしたが、むしろ被害がなかったためにこのような記述となったとしたほうが妥当なのではないだろうか。以上より、備後でも地震による揺れのみであったと考えられる。

§ 4. 伊予の被害状況

伊予国(愛媛県)での被害状況については、中西(2002)が詳しい。ここで示された史料からは、被害は伊予郡・西条市と北部に集中していると思われる。ただし、史料の成立年が古いものでも地震後80年ほどが経過してのものである点には注意が必要だろう。さらに、中西(2009)では板島城(宇和島市)が地震により被害を受けたという史料を紹介している。もしこの史料記述が正しければ、伊予の被害は広範囲にわたっていたことになる。

1681年に編纂された地誌『宇和旧記』によれば、三島神社(西予市)が文禄五年に洪水で被害を受け、同年八月に再建されたという。宇和島周辺では地震以外の災害で被害を受けた神社も存在したらしい。このような事例は他にも存在する可能性があり、伊予郡・宇和島間の被害状況については、史料の精査とともに、さらに検証を続けたいと思う。

§ 5. おわりに—伊予地震の可能性と被害範囲

瀬戸内海周辺について、現在分かっている史料からは、四国側で地震被害が見られる一方で、山陽側での無被害が目立つ。讃岐の被害状況についてはいまだはっきりしない点もあるが、『一宮由来帳』などの被害記述が正確であったとした場合、この被害は伏見地震によると考えられる。

伊予の被害は、豊後地震によるものか、伊予地震が存在するのかが問題となるが、安芸が無被害であること、また豊後地震の想定震源域や地震の日付から、伊予地震の発生を考慮するべきではないだろうか。伊予地震は閏七月九日に発生したと考えられ、同日の京都・鹿児島で感じられた揺れは、この地震によるものだろう。ただし、その被害範囲は伊予国内にとどまると考えられ、規模は大きくなかったと思われる。

参考文献

- 萩原尊礼ほか, 1995, 古地震探究—海洋地震へのアプローチ, 東京大学出版会
- 中西一郎, 2002, 文禄五年閏七月九日(1596年9月1日)の地震による伊予での被害を示す史料, 地震(第2輯), 第55巻
- 中西一郎, 2009, 文禄五年(1596)閏七月豊後・伊予地震による伊予国板島城(現宇和島城)の被害, 北海道大学地球物理学研究報告, No.72